

来た遊戯は乏しいと思ふ。故に幼稚園なり小學校に於ては、其邊に就て考へる事が必要であると云ふ考へであります、(つづく)

There is no riches above a sound body, and no joy above the joy of the heart.

健康の身體に越ゆる富なく心の喜に勝る喜なし



雜

幼稚園案内



録

東 基 吉

近來に至つて、女子の職業としての保姆開けた。電話交換手としても女子を採用するし、郵便事務員としても女子を採用するし、其他會社とか商店などに於ても大に女子を採り用ふといふ傾向になつて來た。之はつまり女子の事業に對する價値といふものを漸く世間が認むるに至つた

のであるが、抑々又女子の方から見ても、何か一つ身に藝を覺えて置く、職業の智識と技能とを得て置くといふことは將來、例令、人の妻となるにしても、頗る必要だと感じられて來たからに違な

女子の執るべき職業は、勿論此他種々多方面に開けた。然し吾人の考ふる所によると、其中最も適當したものは、教育に従事することだと思ふ。

一般女子の天性其他いろ／＼の點から考へて、教育事業は最も適當した職業だと信ぜられる。されば外國に於ては勿論、我國に於ても、近來著るしく女教育の數を増加した事は、事實である、(彙報欄參照)而して、幼稚園保姆として、幼兒の保育に従事することは、教育事業の中でも、殊に適當した職業である。第一、將來、人の妻となつた曉

には婦人は到底家庭に於て、幼兒保育の任に當らねばならぬ。而して幼稚園保育に従事することは、即其準備を造つて置くと同じことである。幼兒の心身發達の理法だとか、之を助長させる一般の原則などは、將來人の母となるには、是非とも心得て置かねばならぬのである、而して幼稚園事業に従事するには、是非之を充分心得て、其上實地保育の事をせねばならぬから、將來自分の子を育てるに非常の經驗を得ることになる。獨乙あたりでは結婚の資格を得る爲に態々幼稚園保姆養成所に入學する者が多い相だ。次には、一体に婦人の温順和氣の性質は、最も彼の可憐な幼兒の友たるに適するのである、温和な婦人は、此事業に従事するによりて、益温和となり、よし然らざる者も此天使の如き一群の中に這入つては、どうしても

靈化せられて、勢ひ天女の様な心持にならざるを得ない。次に、今日に於ては、又資格を得ることが割合に容易だ、即尋常科の准教員の資格を得れば幼稚園保姆となることが出来る、夫でなくとも、府縣知事が、其履歴を見た上で、之ならざらばといつて、免許を與へてくれれば、夫でなれる。他の事業から見ると、現今我國の規程では、一番容易である。夫で俸給はといふと、先づ東京市内などでは、主任の保姆で凡そ十四五圓から十七八圓普通の保姆で八九圓から十二三圓が通例の様だ、地方へ出ると、主任で二十四五圓から十七八圓普通の保姆で十一二圓も得られる、先づ自分だけ食つて行けることは、大丈夫である。以上の點から考へて、幼稚園の保姆といふ職業は、女子に執りて、至極適當した事業だと思ふのである。

之から、數回に亘つて、幼稚園事業の大略を述べようと思ふ。

幼稚園及保姆幼兒の數

幼稚園は、追々其必要が認めらるゝからして、漸次其數が増加するに至つたが、然も我國に於ては、其發達進歩は未だ盛だとはいへぬ。外國殊に北亞米利加合衆國及佛蘭西などは、頗る盛況である、左に此二國の園數保姆幼兒數を擧げて見よう。尤もこれは三四年前のである。

園數 保姆數 幼兒數

合衆國 四、五四〇 九、二三四 一八九、六〇四
 佛蘭西 五、八〇三 九、六八二 七四四、一二六
 我國の四五年前の調査によると次の如し、最も一兩年の間に自分の知つて居る範圍でも、大分増加したと信じて居る

園數 保姆數 幼兒數

二二〇 六一八 二二、八六一

日本で幼稚園の發達が、遅々として進まないに
ついでには、勿論いろいろの事情が原因をなして居
るであらうが、保姆に適當なものを得ないといふ
ことが、其最も主要な原因の一であらうと考へる。
而らば何故保姆に適當な者を得ないかといへば之
にもいろいろの原因があらうが、

保姆養成所

といふ様な學校のないのが、確に其一因であら
う。地方では、所によると師範學校女子部とか、
女子師範學校などで、會に、保姆養成科を置いて
居る東京では、教育會の事業として二三回、半年
の講習會を開いた事もあつた。然し何れも、其時

日といひ設備といひ不完全で、到底、満足な結果
は疑はしい、女子高等師範學校で、先年一ヶ年の
年限で、保姆練習科を置いたが、之も現今は打ち
絶えた。要するに、満足に保姆としての訓練を與
へる機關は、今日の處遂に見出されないものである。
外國に於ては、保姆練習學校といふのが、大抵の
幼稚園に附屬して居つて、其處で保姆としての修
業が出来る様になつて居る。

保姆の資格

然らば、其所謂保姆となるのには、どんな資格
が必要か、欲をいふと、中々述べ切れることは出来
まいが、先づ、大體を記して見よう。

一、身體の強壯。何の職業にも、之は極めて必
要であるが、わけて、斯道に當るには身體が弱く

ては、中々幼兒の面倒が見えぬ。別して、保育に禁物たる、短慮、不忍耐、怒りつばい事、不機嫌等は、身體の弱い人には、とかく有り勝ちである。

二、慈愛同情に富むこと。たいまつとめでは、

幼稚園のことは、とても出来ぬ、心から子供を可愛がつて充分の慈愛と同情を以てかゝらねば、到底人の子……何事も辨へのない幼兒を指導して行くことは出来まい。幼稚園のことは、他の教育事業よりも餘程献身的の分子が含まれるのである。

三、忍耐。不忍耐といふ言葉は到底、こゝでは禁句である。何れ三つや四つの子だ、理屈を言つたり叱つたりは、効が少ない、のみならず、反對に惡癖を與へる様なことになる。詢々として倦まず撓まない愛情を以て感化することを力めねばならぬ。一寸した事に腹立て、見たり不平言つたり

する的人は、到底向かないのである。

四、快活。しよつちう陰氣で曇り勝ちの人は面白くない、一體が快活な子供のことだから、指導の任に當る人も餘程快活でなくてはいかぬ。

其他數へ立つれば、いろ／＼あらう。幼兒の理想になる位な儀表も必要だらう、自然と薰化を與へるの徳操も言はずもがな、要するに此點に於ては成るべく品格が高くなつてはいかぬ。

五、智識。いろ／＼な理科博物其他文學上の智識に富んで居ることを要する。然も之を子供づく表出する技能が必要だ、何によらず子供は問ひたがる、之に向つて極めて子供らしく、併も眞理に合つた答をしなければならぬ。従つて保母たる人は、何れ讀書の嗜は勿論、萬事につけて研究心に富んで居ねばならぬ。

六、以上は先づ、一般普通の資格といつてもよい。而して特別の資格として茲に、教育の理法と術と、殊に幼児保育の理論方法を心得べきこと、従つては、兒童精神發達の理法即兒童心理學及生理學、衛生等の一般の智識をも持つて居ねばならぬ。

(未完)

蠹魚のくひあまし

一日書を曝らす。いたく虫くひたる冊子あり。手にとりて見るに「子そだてぐさ」と題せる一篇なり。其の説く所致て嶄新にもあらず。且つたま〜古めきて如何はしき節なきにあらざるも。さりとしてあながちに棄つべきにあらず。こゝに其の或る部分をうつつして、讀者に紹介する事となしぬ。

子を育つる事は父母の教にあり。そが中に母はとりわけ心せざれば成長して正しき人にはなり難し。然るを世には父は教ふるもの、母は養ふもの

とのみれもふは甚しきあやまりなり。そは子うまれて四歳五歳になるまでは母の懷をはなれざれば、父よりも母の教ふるが近きなり。父の教ふるは七歳八歳より後の事なるから、まづ其までに母のよく教へざれば、七歳入歳になりても愚にして父の教も受けざるものなり、そは俗言にも「三歳兒の魂百まで通る」といふ。此言まことに然り。抑人の魂は神の資にして教を受けずとも自然に善なるものなれども、世の凶惡にまじはりて善を失ふなり。されば神の賜へる本づ性の眞意に違はざる様にと教ふべきことなり。

たとへば木草の種を植ふるに、其の種はよく眞直にのびん事を欲するを、それを人々手いれして成木させんとする時は、却て自然と成木たるとはおとれるなり、又若木の中、わしく癖つきたる木

は成木しても直る事なし。人も之に異なる事なしとかくに小兒のうち、くせつきたるは、成長してもなほる事なきものなれば、母たるもの其心をえてよく育つべきなり。

しかするには先づ母たるもの平生に心を正しくせずばあるべからず。いかにとなればその子の形となり、氣となるものは、みな母の感によりて各別なるものなればなり。感とは見るもの聞くものにつきて、よしとかあしとかうれしとか、悲とかあるはおそろしとか、拙しとか、其物の是はと思ふ事あれば、胎内の子其の感に應じて其の氣を受其の形をうくるなり。故に兎肉を食ふて兎口を生み、狸を食ふて毛生したる子を生むもの世にはままわり。いはんや悪食して胎毒を生ずるに於てをや。

因にいふ。海に住びヒラメといふ魚の腹に子のあるうちは、餌を食はずといふ事、釣するものに之を聞けり。人として悪食するはヒラメにかとれり。また火事を見て赤き紋ある子をうみ、首く、りを見て首に紋ある子を生めるものあり、是を以て若き女は目に怪物をみるべからず。怪物を見る時は胎内の子其の形をうく、故に獸を獵るもの、子に、稀に獸のかたちに類せる子うまれ、鳥をとるもの、子に雀目の生るゝことあり。是を世には報ひなりといふなり。

報にてさる事もあれど。大概感によれるものなり。それゆゑに名醫頼案といふ醫書に、越の國に夫婦あり。大善寺といふ寺の金剛神の側に鍾養して其の婦を居住しむ、一子をうむに其の兒の形ち顔のすみに肉起て角のごとく、鼻の孔は縮りて夜

又しやに似にたるは、蓋けだ婦人とじんこゝに居ゐするが故ゆゑに、偶たま其その縁えんに觸ふて感かんじてこの形かたちをうけ得えたるものなり
古人こじんの胎教たいけう謹じんしませばあるべからずとあり。此説このせう
よく／＼思おもふべきなり。

さて若わかき女をんなは神佛しんぶつといへども、形かたちのあしかるに
は詣まうつべからず。世よに子安こやすの觀音くわんおんといふもの、美
女ぢよとの子こをいだけの姿すがたなるは、此心このこころを得知えしりたるも
の、作つくりそめたるにこそ。かくて人は見みるもの聞き
くものに付つて、是これぞ感かんなきといふ事ことなし、故ゆゑに人
は萬物ばんぶつの氣きをかぬるなり。そは多口たぐちにしてよく手
足あしを動うごかすものあり、そはキリ／＼スやミンサツ
エエに類たがひせる人ひとなり。他目ひとめには篤實とくじつらしく見みせて、
人ひとに油斷ゆだんをさせ、我わがが利りを得えんとかまふるものあ
り、こは空そらねむりして盜ぬすする猫ねこに類たがひせるなり。淫いん
亂らんといふものあり、こは守宮しゆきうや鶏にせとりに類たがひせる人ひとなり。

食しよくを見るごとくはまほしがるものあり、こは蠅は
に類たがひせる人ひとなり。他たの手てにあるものをほしがるも
のあり。こは鳶とびに類たがひせる人ひとなり。食しよくを惜おしみてくさ
りそこぬるまで、貯たくはへ置くものあり、こは鼯鼠いたちに
類たがひせる人ひとなり、此等これら皆みな禽獸きんじゆうに類たがひせるところにて人
の恥はべき所ところなり。

然しかるを心こころの不正ふせいなるものは、常つねに賤いやしきものを
のみめづるが故ゆゑに、生うまるゝ子こも又またいやし。かゝ
れば常つねに心こころを正ただしくして不祥ふしちゆうのものをみるべから
ず。瞽女さかめのうたふ心中しんぢゆう節ふしなどは、ことに不祥ふしちゆうのさ
はみなるものにして、婦人ふじんの聞きくべきものにあら
ず。もし深ふかくめづるに至いたつては、瞽やちをうまんもは
かられず。そは金剛神こんごうしんに感かんじて夜叉やしやを生うめるとな
ぞらへて辨わかまふべし。又またうめる子の叔父おぢ叔母おぢい從弟じゆうていな
どに似にることなどのあるは、母ははたるものゝ親族しんぞくを

むつぶこゝろの深さがいたす處なり。このゆゑに深く感ずる所ありて念々忘れざれば、其の感ずる所のまゝに欲する處の子をうむものなり。

さるからに劍術の家には代々其の術に達せる勇
者うまれ、伎女の家には代々藝にいたれる女子う
まれ、また國と處々によりて美女の生るゝ處は美
女、工匠の生るゝ處は工匠と、自然にさるものゝ
うまるゝ、これ其の土地の人情にて美女をうめる
ものは美女を生めるによりて人の愛を受けて、家
とめるが故に他もうらやみて美女を生まん事をお
もいて、常に美人を感じて念々忘れず、故に美女
をうめるなり。小夜の中山、草津の山中のたぐひ
すなはち是なり。工匠も之に同じ。こゝをもて是
を見れば美女をうまんもやすく、勇者をうまんも
かたからざるなり。

されど美女をうまんとしても美女うまれがたく
勇者をうまんとしても勇者うまれやすからず、ま
た誰一人醜女をうまんとかもふものなく、悪者を
うまんとかもふものもなければ、さるものゝ生
るゝを以て、予が此説をおす時は、非なるが如く
なれどさにあらず。人は心多きものにて、見るも
の聞くものにつきて、之ぞ感なきといふ事なし。
故に春の朝、花になく鶯をきけば心浮き立ち、秋
風に木の葉のちり行くをみては心悲しと思ひ、其
の時々心動くが故に、我が欲する處の心一定せ
ずして、我が欲する處の子うまれざるなり。たと
へば誰にまれ身は貴く家は富まん事を願はざるは
なく、家はまづしく身はいやしかれとはおもはず
れども、儉素といふ事を守ることなりがたくて、他
が美味を食へば我もくはまほしく、佗が美衣を着

れば我も着まほしく思ふが故に、終には奢に走りて家もほろび、かしてまりて身を正しくせんことはしにくく、足をそらして狂言を呶すは誰もしやすきが故に、遂にはこもかぶりとなるが如し。かくて婦人たるものは常に夫の心を心にしていさゝかも私意なくと心がけざれば、家業を精達して子孫繁榮する事は難し。あらぬ遊業などに心うつるが故に放蕩なる子の生るゝなり。

さて世には女天下と云て、何事も女の先だちてする家あり。是は甚だよからぬ事にて、家めつ亡の基なり。かゝるものゝ子には女子をうまば淫亂男子をうまば放蕩ならん。されどさるものゝ子にも、淫亂放蕩は生れずして子孫よく榮ゆるなり。是は別に善行ありて然るか、又は夫の仁心あるによれるか、然らざれば積善の家には必ず餘慶あり

といへる類にもやあらん。必しも吾がいふことをなわやしみそ。こは正しき證ありていふ事なれと其は今は云はず。こはとみに婦女子の爲にものせるにて、わかりやすからん事をむねとつとめたり。ねがわくはあまねく人の見ん事を。

煙草好き男

大抵の男の人は、煙草をのむ習慣をもつて居るがのべつにのむことをしないで、時と場所とを定めたらば宜しからん。西洋に留學せる日本人は、何處と定めずに、無闇とふかす所から、客間や應接間の窓掛けを焼いて仕様がな相だ。

子供の間食

何れは、大人から較べると發達の盛な子供の事だから、三度の食事時間外に、食物をはしがるのは

無理でない。夫に付きて、英吉利のロツクといへる人の言葉に、子供が三度の食事以外に食べたがる様だつたら、他のものをやらないで、パンをやつたらよからうとあつたが、我國でも、せめてはしつこい餡の這入つたのや、お砂糖ぐるみのお菓子とを與へることをよして、なるべくなら、間食に御飯を食へさす事にしたら、身體の爲にもよからうし、又儉約にもなるであらう。

痰の検査

東京の衛生技師の某氏、試に新橋ステーションヨシでいろ／＼の人のほき散らす痰を拾ひ集めて検査をした所が、其中で澤山な肺病の微菌を發見したとの事だが、一體日本人は、どこといはないで、痰や唾をはさちらす傾がある。何時だつたか態々唾壺を備へ付けて居るにも係はらず、廊下ではいて

居る紳士を見た事があつた。早く改めたい癖である。

瀧廉太郎氏

音楽學校を卒業して、獨乙に留學を命ぜられ、間もなく病を得て昨年歸朝した同氏は、本年に入つてからとう／＼肺患の爲めに斃れたが、生前、既に肺病と知つてからは、人と對話するに決して眞向ひになつてはしなかつた、他出するには必らず自分の痰壺を持つて歩いた、來客に接して茶などくむ時には、自分で注がないで客自から注がせた、傳染病者としては、誰でも此位の心掛があつて欲しいものだ。

計入制出

入るを計つて出るを制すとは經濟の原則である、然るに華侈の風潮は、今日では此原則を殆んど踐

躡して居る様だ、三十圓の收入よりなき者も、其外觀を飾るに於ては、殆んど五十圓七八十圓の收入ある者と同じ様に苦心して居る、食物も滋養あるものでなくてはいけない、住居も相當なものがほしい、少し遠ければ歩くのはオツクーだから車にも乗らねばならぬ衣服も綿服や二子では娘は人前に出せぬ、勝手のことや拭き掃除なども下女を置いて、妻君はたゞ指圖をして行かうといふのである。要するに今日の原則は入るを計らず出るを制せずである。此頃は寧ろ實業家よりも月給取に多い、月給取に貯蓄の出来ないのも無理はない

讀書餘錄(三)

婦人善悪兩面鏡
氣質

學 水

シルレルの小品文の中、此一篇、頗る趣味に富んで居る。原文の題目は『婦人の複雑の驚くべき一例』といふのである。筆水の筆、中々此大詩人の潑刺自在な文章の百分一をも寫すことが出来ない。例によりて、其梗概を紹介する許りで

飛鳥井侯爵といふのは、此國貴族の名門の系統で、當世向の若縉士、何不足なく其日々を豊に過して居る立派の身分、氣前も至つて愉快な、從つて交際も甘く、十人が十人ながらに好かれる性質の人である、然したゞ一つの缺點はといふと、女子の婦徳なといふことに付いては、格段氣に留めない方なのである。所が、或日不圖した所からこの侯爵の心を動かすに至つた一人の婦人は古澤夫人といふ身分のある後家さん、心狀の伶俐な、

風采の閑雅な、交際に抜目のない、然かもどこまでも、剛氣で氣位の高い、古澤夫人である。婦人の歡心を得んとて、今迄に格別骨を折ることも知らなかつた侯爵は、古澤夫人を得んがためには、あらゆる手段を盡して、殆んど一切を犠牲に供した位であつた。前の婚姻が餘り幸福に終らなかつた古澤婦人は、今回侯爵からの申し出でに對しても、種々と纏まらない考に心を苦しめた後、遂に侯爵の心に従ふことになつた。侯爵の喜びや知るべしで、侯爵は之で無上の幸福を得たのだ。併しながら、若し侯爵の心をして、此當時これ程の狂熱を以て愛し又自身も愛せられた所のこの優しい婦人に對していつくまでも眞實を盡して行く事ならば、勿論侯爵の幸福は十代萬代までもことなされたであらう。

五十六

さて、一二年は譯もなく過ぎ去つたが、此頃からして侯爵は、漸く夫人との生活に付いて單調の感じを起した。そこでいろ／＼の注文を夫人にす、随分無理な注文にも夫人は一々同意を與へた。所が一日一日と過ぎ行く中に、何時しか侯爵の姿は夫人に遠ざかり行くのみとなつた。晝の御飯時にも見えられない、晚餐の席にも出られない、何だか何時もソワ／＼と忙がし相にして、夫で會さか夫人の室を訪ふことがあつても、何か用事を拵らえては成るべく短かく切り上げて返らうとする、時によると、何だか分らないが、獨りでブツ／＼口の中でツブやきながら室内をせう事なしに歩いて見るとは辛氣相に長椅子に身をうち倒してそこいらに積み重ねて在る本だの新聞だのを、手當り次第にあれこれと取つて見るとは投げやつたり

して、夫からア、アとため息などしながら遂に眠つて仕舞ふ。

夫人も、是に至つては、自分が既に侯爵から愛を失つたのだといふ事を知つた。夫で或日のこと、珍らしく晚餐を共にした後で遂に意を決して次の様な話をしました。

『御前、何をさうお考へ遊ばして居らつしやる？』

『お前こそ、何か考へて居るのだらう？』

『夫はさうお見えになるかも知れませぬ、鬱いで居ると仰つしやれば、鬱いで居る様にもありません。』

『じゃあ、何故鬱いで居るのかね？』

『別に何と申して』

『そんな事はありますまいじやないか、別に隠して居るには及ばん(ア、アと欠伸しながら)判然

か話しなさい、言つて仕舞へば、夫で二人とも反つて清々するじやありませんか、

『ハイ實は餘程以前から申し上げようかとは存じて居りましたが、何分にも、御前を侮辱する様な事にも當るかと思ひ存じて、』

『なに、私を侮辱する？、お前が？』

『まわ、そんな事にも當るかと思ひまして……而し、私が別段罪のないと申す事は神様が證明して下さいます。たゞ何事も神様の呪咀だと存じます。』

『フーン、夫から？』

『ハイ、夫で私はたゞ不運な身分だと思ひます、夫でつまりは御前をも不幸にするかと考へまして……が、御前、もう、何も申し上げません、』

『お咄しなさいよ、お前、何か心に秘密があるのだから、夫婦の間に秘密を持てるなんて、始かそんな事はないといふ條件じやありませんか、』

『御前、全く其事です、こんなに私が悲しい思を致しますのも、つまりは今お謎になつた二人の間の秘密の爲です。私の近來の様子が、まるで前々と打つて變つて活氣がなくなりました事は、御前には御氣がつかせぬ、只今では毎日三度々の御飯も甘く戴いたことは一日もありません、いゝえ夜分も録に眠れない位です。さあ、こうなりますと、女の愚痴とは申しながら、ついでつまたぬ考も起りまして、夜更けて寝られぬまゝに、つい、獨りである事も申して見ます「御前は果しても

「私を愛して下さらんのだらうか？ いや、元々通りに違あるまい、夫では何か御前に向つて私に不平がましい事があるのではせうか？ 別に何も無い。もしや御前には他に何所かお遊び所がお出来遊ばしたのではありはしまいか、よもやそんな所は、と申して、御前の方が、前々通りおやさしくかいでになるとすれば、これはどうしても、自分の方が變つたのに違ひない、そうだ自分の方が變つたのだ、夫で、今では、あの當時、かねて、行くはと心に期して居つた望みの光りも消えれば、嬉れしと思つた恩愛の影も隠れたのだ……御前が御歸りが遅いといつて、今迄の様に、嬉しい様な心配もなし、お歸り遊ばした所が、お足あとの音が聞こえた所が、取次の知らせがあつた所が……否々お這入

り遊ばしたにしても、より嬉しい飛び立つ氣も致しませぬ。アー、か様の事はもう、とつくに過ぎ去つたのだ、私はとう／＼見捨てられたのだ

『これ、お前は何をいつてるのだ』

夫人は是に至りて、兩手を顔に宛て、頭を垂れたまゝ暫らくは、無言であつた、が、やがて、又口を開いて、

『ハイ、私には、御前がどう御返事遊ばすといふ事はチャンと分つて居ます、こんな事を申し上げて、どんなお叱りを蒙むるかといふ事はもうチャンと分つて居ます。どうか、其邊は御免しを願ひます……イーエ、どうか十分御叱り下さいませ何れ、私が申し上げたいのが悪いのですから仰しやる丈の事は皆承はりませう。然し御

前、實其通りでございますよう、自分を欺き御前を欺くと申す事は、此上もない耻辱でございますれば、思つて居る丈の事を申し上げたのでございます。そりや御前は、矢張元々通りの御前ですが、私はもはや従前の女でありませぬ、然し、夫でも私は御前を尊敬は致します、以前よりかをもつと尊敬します、けれども、一體女と申しますものは、まゝ御前も私で御承知になつて居られませうが、一體が、氣の小さなものですから、もはや愛情がなくなつて仕舞つたと申しては、とても心に深く隠して、装うて居るなと申す事は出来ません、私のこの自白、實際左様感じられますが、この自白は、私は最も恐ろしい事の様に信じます、どうせ、私は、輕薄な女です、虚妄者です、どうか、たんとお咀ひ遊ば

せ、存分にお責め遊ばせ、一番惜い女だといふ
極印を私の顔にお押玄遊ばせ、イーエ、何も私
自分の故です。ハイ、何でも御前の命令通りに
承はりませう、然したつた一つ御前を瞞した事
など申す事は、之迄一つも覺えがございません
から之丈は仰しやる通りには承はることが出
來ません。

かく言つて夫人は遂に長椅子に身を打ち倒して
聲高く泣き出したのである。
(未完)

那瀑と瀧八丁(本紙口繪の解)

紀州和歌山市より船若しくは陸路によりて南に下
ること凡そ四十里にして熊野地方に至れば、北は
山岳重疊、屹然又囂然として恰かも屏風を立てた
らんが如く、南は太平洋海岸に迫りて、怒濤近く

山麓を洗ふ。面して八十丈と稱する那瀑は恰も銀
河の天より下るが如く此山岳の間に懸る、船にて
航する者は、潮岬を過ぎて甲板上よりよく此偉觀
に接するを得べし。行きて近く瀑邊に遊ばんか千
歳の老松古杉は蒼鬱として天日爲めに暗く、十數
町を距て、轟然たる水聲と共に、飛沫來りて人の
袂を潤はし、夏尙肌寒さを覺ゆ。土俗那智の四十
八瀧を稱す、而して一の瀧より三の瀧までは羊腸
たる山徑の間、樹枝にすがり蔓を攀ちて至るを得
べし。本紙寫す所のものは其最も大なるものにし
て即一の瀧と稱するもの、眞景の偉觀遂に其面影
を見るを得べきのみ。此邊古跡多し、文覺の事蹟
は何人も知る所、而して花山院の事蹟は人餘り之
を言はず、三の瀧に近く、院の玉座をしつらひし
と稱する跡あり、大鏡に

熊野の道に千里濱といふ所にて、御心地をこなはせ給へれば、濱づらに石のあるを御枕にておぼとのごもりたるに、いと近くあまのしほやく煙のたちのぼる心ぼそさ、げに、いかにあはれにおぼされけんな

たびの空夜半のけぶりとのぼりなほ

あまのもしほ火たくかともみんとある、以て徴すべし。

熊野河口に船を藏して溯ること凡そ八里、河流分れて二となる、左すれば即ち本宮に至るべし。而して右に上ること約二里、流れ愈急にして愈巖然も忽ち深潭、水青くして動かざること油の如き所に達す、静八町の眞景即ち之なり。水深さ所十數尋、然も清冽、小魚自ら其影に驚き激瀬として逃遁す。兩岸の絶壁高さ數十丈、斷々として削

り成せるが如く、天に朝して日光を遮閉す。船を浮べて一日の清遊を此邊りに貪るるに一身是れ飄々として畫中の人の如し。斷岩の間に散點せる人家は即ち田戸村の一小村落なり。

那瀑の壯觀、之を丈夫戰陣に立つて萬軍を叱咤するに比すれば、静の美觀は以て、天女仙郷に遊んで翩翻として舞樂を奏するが如けん。

打つけに物ぞ戀しき木葉ちる

秋のはじめをけふぞと思へば